

私と田川先生との出会いは暁星国際学園が設立される前後からだから、まだそれほど古いものではない。しかし旧制暁星中学の同窓であり、田川先生の兄員一氏とは暁星中学の同級で、卒業後も東京のカトリック教会の対抗野球試合などでバッテリーを組むほどの親友だったから、私は田川先生とは戦前からの知り合いのような感覚を持っている。

私は田川先生より五つ兄貴だが戦前、日本が急激に軍国主義化に突入していったいわゆる「狂瀾怒濤」時代を共にした同世代の共通意識を持っている。しかもこの厳しい時代をカトリックの信仰を心に抱いて、いわば時流と闘いぬいた戦友でもある。今、田川先生に会う度に私は昔の「暁星中学」の雰囲気を感じ出す。

そこに生きたムッシュ(先生)方や友だちやブレオー(雨天運動場)や聖堂のイメージが鮮やかに浮かんでくる。戦後五十年たつて時代は激しく変わったがカトリック・ミッション・スクールとしての暁星で受けた多感な時代の教育の根は今も枯れずに残っている。

佐々木慶照氏(カリタス女子中・高校長)は次のように言っておられる。「戦時下のカトリック学校はまさに受難の時代でした。軍部の監視下にあつて外国語教育も宗教教育も禁止され、外国人宣教師はスパイ扱いされていた。この厳しい時代にカトリック学校がある意味で最もミッション・スクールとしての使命を果たしていたといえる。宗教が教えられない時代の生徒たちが、終戦直後にどれほど受洗したか、多くの召命者が出たかということはよく知られています。外国語が教えられなかった時代のカトリック学校が国際人をつかりと育てていたということも考えてみたいと思います。カトリック学校には修道者のうしろ姿がありました。卒業

生の語る大きな影響をうけたシスターというのは黙々と廊下を掃除していたシスター、下校する時入った聖堂で祈っているシスターのうしろ姿だったように感じます。このことは現代にもいえることです。沈黙の教育、無言の福音宣教の力にカトリック学校は支えられていました」。

田川先生はいうまでもなくまずカトリック司祭であり、そして教育者であり、さらに学校の経営管理者である。また田川先生の特徴はある種の「カリスマ性」にあることは誰しも認めるところだと思ふ。この「カリスマ性」がどうして生まれたのか私には分からないが、恐らく少年時代の家庭環境、青年時代の厳しい修道教育をくりぬけることによっておのずから身についたものと思われる。「カリスマ」とはカトリック的にいえば「神から与えられた使命」の意味だから結局それは生まれながらの資質というほかない。いずれにしても田川先生は聖と俗を巧みに調和させる能力を持っていることは確かだ。今はやりの「新宗教」の「教祖的カリスマ」と一脈通ずるところがあるように見えるが、私はそれとは似て非なるものだと考えている。やはり田川茂の眞骨頂はカトリシズムなのである。

敗戦と共にカトリック学校には春が訪れ、ミッシェン・スクール・ブームが起り、多くの修道会が来日し、本部の支援の下に短期間に目覚ましい発展の基盤を確立した。しかし日本社会が高度経済成長の波に乗り経済一辺倒の価値観が浸透するにつれ、青少年の問題がしだいに深刻化し、家庭内暴力、校内暴力、登校拒否、いじめ、性の乱れ、麻薬などさまざまな形で現われた。ミッシェン・スクールもそのような社会状況に翻弄されることになった。カトリック学校も世間一般の「進学校」化に抗することができず、それにつれて「ミッシェン」性をうすめているのが現状であろう。カトリック学校は今冬の時代にあるといえる。田川先生もこの風雪に耐えているのだと思う。

日本はバブル経済の崩壊とともに急速に衰亡の道を歩んでいるかにみえる。ひと言でいえばそれは戦後の日本教育の総決算といえるのかもしれない。もちろんその責を教育者だけに負わせることはできない。むしろ日本の戦後教育の方向を定めてきた政治と行政当局の責任をこそ問うべきであろう。しかしそれらがいかに大きな誤りを犯したとはいえ、それに抗して教育の眞髓を示し実践した大教育者を輩出できなかった事実も否定することはできない。

前本の編者であった故山崎宗次氏はその序文で新国際人の条件として ①語学がメチャクチャにできること ②自国の言語つまり日本語と日本文化をしっかりと身につけていること ③やわらかな心もち、異文化をはじめ、なにごとにもフレキシブルに適應できること―の三つをあげておられる。そのとおりだが、あえてそれにつけ加えるなら普遍的な「人間性」に根ざす思想と倫理性である。今真に求められているのは二十世紀の文明のたどった光と影を超えた「新しい世紀」にふさわしい人間像であり、それは従来の「国際人」のイメージを超えるものでなければならない。地球の危機は確実に増大している。日本の教育の課題は単に語学や日本文化を身につけた教養人ではなく、世界、人類が求めるものに応えることのできる新しい「地球的人間」ではないだろうか。カトリック学校の目標もそこにあり、第二バチカン公会議以後のカトリックはそれを実現できる最も大事な条件を備えているのである。そしてそのことはカトリック司祭、教育者田川茂に課せられた最大、最終の課題でもあると思う。

終りにあたり、田川先生のプロフィールを語る寄稿文をお送りいただいた関係者各位に、心から御礼を申し上げます。

また、今回の本の刊行は(株)誠文堂クリエイティブ代表・村瀬雄一氏ならびに(株)誠文堂新光社のご協力によって実現したものであり、深く感謝するしだいである。

平成9年6月

(社団法人共同通信社顧問)